闘いで思想も変つた
王子闘争を振返り懇談会
ピケ小屋で学習

組合分裂一骨抜きの攻撃を資本家たちは根近めだつておしすすめている。このため大きな闘争がつぎつぎと展開されているが、なかでも殿様組合といわれていた王子労組の闘いは日を追うにつれ全国的な注視をうけて闘われ、階級対階級の闘いとして発展した。第二組合の発生により闘いは熾烈をきわめたが、組合員の目覚めはついに百四十日間の闘いをたえ得る程ども成長し、はげしい闘いがつづけられた。編集部では王子闘争に炭労オルグとして活躍された六氏（堀川三雄支部教宣部長は炭労中央委員会出席のため欠）に集つてもらい、闘いを振返つて闘いの意義、第二組合の問題、組織のことなど堀下げた討論をおこなつてもらつた。（司会＝境編集部長）

司会　みなさんたちは炭労のオルグとして名古屋の春日井で王子闘争を指導してこられたわけですが、あそこの闘いにはいろんな意味ではかり知れない教訓があつたと思います。きょうは闘争の内部から問題をえぐつてもらい、闘いの本質、教訓を探つてみたいと思います。まず闘いの特徴ですが、一番はじめにオルグとしていかれた辻さん、当時はどんな状態でしたか。

辻　私たち（辻、堀川）がいつた当時は、ただ、執行部の指導で〃闘え！闘え！〃という時期だつた。私が率直に感じたことはこれでは組織づくりもできないし、闘争意欲が一時的な興奮であり、このまま放つたらかしておけば第二組合の方に走つていう時でした。

司会　それまでは第二組合がふえて行く傾向だつたんですね。

辻　そうですね。私たちがいつておちついたという状態です。

辻　会社がさかんに口説き、第一組合は間違つていると宣伝していました。

司会　結局、学習活動で組織を固めるということで、つぎのオルグにバトン・タッチをしたわけですね。そのどが永田さんと田中さんですか？

辻　それまでにはだいぶ間がありました。

組夫にも味方がいた

司会　水源池ピケをやめた戦術転換の前後はどうでしたか。戦術転換で組合員は動揺しませんでしたか。

辻　水源池を守つておけば紙ができないというので、五十日間くらい守つた。毎日二交替で昼は女、夜は男で全員がピケを張り戦術転換する前に執行委がくるし、警官がきたが実力でおいかえしていた。衝突すると地理的に条件が悪いのでケガ人が相当でることはあきらかで、執行部もそれを考えて、政治局員が相当動いた。結局、一時ここを渡そうということで大会をひらいて戦術転換を決定したわけです

永田　九月二十二日ですね。

司会　第二組合員が工場に入つても用水を止めておけば製品ができない、しかし官憲との摩擦などを考えてピケを解いたということですね。製品はそれによつてできましたか。

辻　直ちにできたわけではないが平常生産の十％や二十％はできたろう。だがそれは製品として売れるものではなかつた。

司会　そのあと永田さんと井上さんが引継いだわけですが、その間の特徴は……。

永田　私たちが行くまでの間に、水源池から水は入つたが、製品は外にだされなかつた。それで北門から製品をだすために警官が一度出動している。その直後に私たちが行つたわけです。私たちが行く前は警官が北門にくる、内部に入つているものが外に出ようとする。そして揉みあつていた。私たちは到着後、直ちにピケ小屋をまわつて話し合つた。おもしろいのは二百名ほどの組夫がいるが、脱落者が外にでるときは必ず警察が動く。そうすると組夫のなかから〃警察が動こうとしている〃と組合に知らせるものがいるのです。スト破りをしている者も本心は労働者です。

司会　内部のものを外に出さんというのは、どういうわけですか。

永田　内に入つているのは職制が多く、それで彼らを外に出して切崩しをさせないためです。

司会　永田さんたちのあとは松尾さんと中屋さんがいつたわけですね。斡旋案の出る前後はどうでしたか。

永田　正直にいつてあれが限界ではなかつたんですか。斡旋案をのりこえてやろうという雰囲気は、言葉では出ていたが、内心ではそれを待つているというようだつたな。

井上　ピーンと感じたのは、情宣のやり方ですが、私たちは三日に現地に着いたが現地では七日ごろ斡旋案が出るそれまで頑張れといつていた。これをきいて私はびつくりした。斡旋案を明待したらとんでもない、有利な案なら話は別だが不利なものはこれを蹴つて闘うと情宣しなければ間違いだと、早速情宣計画をかえさせた。そうしたら斡旋案がどんどん延びて、最終的には私たちが帰えるころ出たわけです。

月末に多い脱落者

永田　脱落者の統計をみると、月末に脱落した者が多い。それは月末ごろになると組合員個人で闘いの見通しをつけている。月の二十五日に八十％の生活資金が出る、それでそれまでに一応の見通しをつけていた者が、金を貰うとバラバラと脱落するという現象がおきている。

松尾　その点は私たちが交替してもそう感じた。二十一日汽車の中で斡旋案が出たということを知つた。現地では当時双方のビラ合戦が物凄かつたんです。どちらにも有利に解釈できるような案だつたのです。

中屋　二十二日に着いたとき永田さんからおそらく斡旋案をのむだろうときいていた。組合員は一時間か二時間説明をきいただけでこれを認めることは無理だ少し考えさせてくれというのが真意だつたようです。一日余猶をもつて審議させてくれと、二十三日再び総会をひらき各部門ごとに審議した結果、これをのまざるをえんだろうということになつた。

松尾　予定されていた提灯行列もこれは提灯行列ではないのだ、あくまでも提灯デモだと意識を変えさせた。勝つた、万才ではないのだと結局行列をデモと切替えた。

家族も一緒に闘つた

司会　斡旋案を大衆討議したのはどんなふうにしましたか。

松尾　一項目ごとにやり、オルグと執行部が参加した。三池でいえば職場分会ですが、これで検討していつた。

中屋　はつきりいうと斡旋案の内容は第一組合員に有利です。組合員だけを集めて受諾を決定すればいい。しかし、家族も含めて百四十日も闘つてきたんだから、家族を含めて決めようとの空気になつていた。

しようとする第二組合員（制服）と、これを

出席者

辻　総務部長（本部）
永田教宣部長（本所）
松尾　〃　（四山）
井上教宣部員（三川）
中屋　〃　（宮浦）
松崎　〃　（本所）
× × ×
灰原書記長　（本部）

き、組織が分解するのではないか？ということだつた。そこではじめたのが学習活動です。〃職場闘争とは何か〃からはじまつた。会社の考えでは、社宅居住者は会社が北海道から昭和二十八年に引連れてきたものと、田舎の娘を雇入れたものであり、これらは会社のいうことは何でもきくということだつたらしい。私たちはこの二者の調和を考え、組織活動をはじめたわけである。何といつても一番心配したのはこの点であり、そのため学習活動で指導したわけです。

司会　そこでは組織を固めつ

組織充実が急務

司会　統一の問題はどうですか。

松尾　こんどの問題はそこにあるでしよう。第二組合としての主体性をもちながら、援するときは温く、またある時には厳しい態度で接し、しだいに引入れる状態をつくらなければならないと思う。

永田　第一と第二と統一することは努力しなければならないが、完全統一を目指してみたところで可能性はないでしよう。それよりもいまの第二組合そのものを、本当に健全にのばしていきながら、少しづつ向うを崩して行く。問題はこちらの内容を強化して行くことが大切です。

灰原　日本の労働組合は第二組合的な要素があるんだから、第二組合ができてもびくともするなということですよ。第二組合は本来ある。だからできた事だけで動揺すべきではない。その辺の決意を固めて日常から組織づくりをやりなさいという事です

中屋　第二組合ができてから自分たちは強くなつたという意見がでてきています。

中屋　さいきんきた手紙をみると第一組合がさらに強化しているそれは、会社は何かにつけて組合の弱体化を狙つているが、そういう問題を一々とりあげて部課長を追求しているそうです。

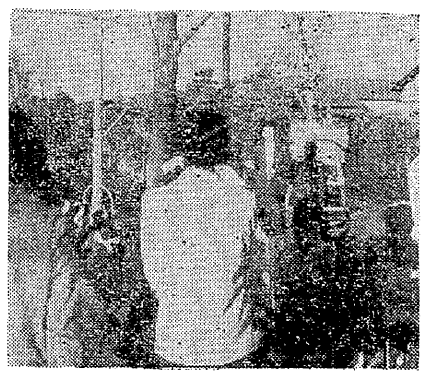
永田　早くそのようにして全職場が態勢固めをすることができればよいのだがな。

永田　ピケの二交替は過酷だつたが、ピケについているなかで、何故自分たちがそうしているかをお互いが考えたでしよう。学習すると同時に、身をもつて闘うということが大切ですね。闘いの経験のうすい組合にとつては、身をもつて闘うことが一番大きな学習になると思う。その意味では、二交替でピケを張つてきたことは大きな意味があつた。それと地域組織がなかつたが、ある意味ではそれでかえつて効果があつたと思う。組長が第一に残つているところは職場がまとまり脱落者が少なかつた面がある。防衛的な闘いの場合職場組織で闘うか、地域組織で闘うかは、地域組織が確固たるものでない限りは職場組織がよいと思う。

中屋　最終的には地域組織を編成して班長までつくつた。こんどは地域分会の育成に骨折つて貰わなければならないだろうと、形をつくつてきました。

松尾　私たちがいつたときに規約改正をして三十名に一名の職場委員、その上に分会長、分門委員長と執行委員をあわせた支部委員会、それに全員大会をつくつた。

中屋　家族組合をつくらなければならないと開眼された、いかに家族組織が大切であるかを知つた、といつていた。主婦会もでき、地域分会もつくられた。こんど闘いをすすめるためには町ぐるみの闘いにならなければならないと感じた、といつていた



辻　組合はあつたが大衆討議などなかつたということですね。

司会　組合としての機関では、要求金額をきめていたのでしようがね。

永田　それをきいてみたが分らなかつた。サア…といつて分らない。執行部にきいてもノラリクラリだつた。

松崎　私がきいて知つたのは、あそこは王子労組の春日井支部という一つの支部になつていて、支部委員会が構成されているがその中から五名に一名が中央代議員になる。この人たちが要求額など代議員会できいてくるが発表していない。全員大会でこういうことがきまつたと伝達されていただけです。本当の討議はなかつたし、またそんな責任をもつた代議員の報告義務感がうすいわけです。

司会　私たちのことを振返つてみると支部委員会、中央委員会と月に四、五回くらいあり、また地域や職場の会議や機関紙もあり、これらをもつともつと大事に活用しなければならないといえますね。

裏切者には憎しみを
百十四日間の労働学校

司会　王子闘争は階級と階級のするどい闘いだつたということですね。

永田　正直にいつて紙パの統一行動それ自体は余りするどくはなかつたですよ。それでよくここまで盛上つたなあと感じた。

松尾　王子闘争は最初からあぶない橋をわたる恰好で、スレスレの闘いでした。これを低空飛行でもずつともちこたえてきたことはえらいと思う。

司会　百四十日間の労働学校で意識が高まつてきたということですか。

中屋　ある人が、自分たちはストライキとは何かよく知らなかつた。ピケに下駄を履いて出てきたがオルグから、下駄でくるとは何事かと怒られ、ピケに下駄履きはいかんことを知つた……と機関紙にだつたな、組合員の批判と不純な分裂傾向のさく動の差を見抜き対処すべきですね少くとも、実質の少いイヤがらせばかりいう連中は、会社に利用され易いことは事実です。この意味で、ほんとうの大衆討論を積極化すべきでしよう。それから、いくら憎しみでも大衆的なやつはよいが、感情的に走つたものは間違いです。憎しみにも質の問題がありますよ。

資本家は第二組合を教育していた

井上　ピケ小屋を回つてみると、これだけ長い間闘いをやつているのに、自分たちだけよくなればよいという第二組合への憎しみが一番強かつたようです。

松尾　ある第二組合の人は就労後は以前と同じ状態で第一組合員の諸君とも挨したい、組合員間のもつれを勤務の中にまで発展させたくない、組合は一つあつた方がよいと思うが二つあつても不都合はないでしよう。第一組合の闘争至上主義は好まない脱落の原因は第二組合から話をきいたり方に共鳴ノ[illegible]

井上　つくづく感じたのは、第二組合ができたなかで会社と闘う組合をみて、このような組合の思いをするくらいならば、いまの三池で日常活動をどんなにやつてもやりすぎることはないということを感じた。

中屋　最後の就労の日、ボイラーに火が入つたのは翌日の二時ごろであつたし、部長が職場要求で追求されて謝つた一幕があつた。組合員がハチマキをしめて労働歌をうたい、職場に入つたときには部課長が〃ハチマキをとつてくれ、旗をおさめてくれ〃といつていたそうで、これはこんどこの人たちが強くなるステップといえるだろう。

井上　就労してすぐ、それまでいろいろ討議したことを職制に突きつけたということで、将来の職場闘争はものすごく発展するだろうと思う。

それから、学習活動の熱心さだこの態度は三池としても大いに学ぶ必要があると思う。学習する態度と、それに職場を民主化

井上　そこは社宅の中に電話ボックスが沢山ある。貴方たちが黙つていて会社はこれをつくつたんですかときいたら、闘争はしなかつたが、組合が会社にいつたからつくつたんでしようといつていた。福利厚生面がすべてそうで、黙つていても会社がやつてやる。組合を通じ交渉する必要性は全然ない。だから、こんなことは要求すべきではないという考えもあつて、組合員は前進していないが、この面での会社の労務政策はとても前進している。

中屋　青年婦人部の研究会の中で組合はなくてもよいではないかという声がでていた。また従業員であつて組合員でもあるその比重はどうだろうかということもでてきた。というのは、会社につとめている従業員であるだが自分たちは組合員だから組合意識ももたねばならないというわけである。

しかし周囲の中小労組が闘つているのをみて応援にいくときには大勢が参加し、部隊をつくつたようにして五里くらいの道を自転車でかけつけるようにまでなつたですよ。

【写真は青空の下で学習する女子組合員と講義する塚元本所支部長】